

原田 大 (はらだ だい)

准教授

専門分野／経営学、環境学、政治

東京大学法学部卒業、東京大学大学院新領域創成科学研究科修士修了。修士（国際協力学）。松下政経塾フェロー、監査法人系コンサルタント（KPMG BA）を経て、東京都議会議員を2期、文教委員長などを歴任。その後、東京成徳大学経営学部非常勤講師などを経て、平成29年現職。



よい経営学、よい人生

あなたは、何のために経営学を学びますか。経営学は幸せな人生につながるでしょうか。

ひとくちに経営と言っても、いろいろなレベルの経営があります。経営学の対象として普通イメージされるのは大企業の経営かと思いますが、中小零細企業にも経営者は当然います。また、企業とはしばしば対置される行政でも、企業経営の手法を応用するNPM＝ニュー・パブリック・マネジメントが流行りました。身の回りでは、家計簿は家庭の経営、おこづかいの遣り繰りは自分自身の経営といえるでしょう。経営学の知見は、様々な場面で、確実に役立てられています。

だからこそ、何のために、どのように経営学を使うのが大切です。わが国では、右肩上がりの経済成長が止まってから、リストラという名の解雇、新規採用の抑制、非正規雇用への転換と賃金抑制が進められ、大企業の財務諸表は改善しました。その半面、貧富の格差などの社会問題は深刻になりました。そして事態はさらに進行し、大企業自身が顧客の購買力の低下と人材不足というしっぺ返しを受けています。企業単体の短期的な経営改革という部分最適が、社会の全体最適や、企業自身の長期的な繁栄につながっていません。

また、経営学的な視点を他分野に持ち込むことがいいことばかりとは限りません。例えば政治は世の中全体の経営とも言えますが、移民や特定の人種・民族の排斥という、いわば市民のリストラを問題解決の手段にしようという考え方があつというまに世界中に広まり、深刻な分断を各国で引き起こしています。本物の政治家は、一時の人気の獲得より、たとえ厳しい視線にさらされようとも、本質を追求するものです。自分の決断が、一人ひとりの人生を、時には命をも左右するという究極の緊張感をもって、事に当たるものです。

もともと、政治家でも、企業経営者でも、ひとりの人間でも、社会や仲間や自分の大切な人を守る立場にあれば、本質を追求することや責任感の大切さは変わらないはずです。

このように様々な課題はあつたとしても、経営学は、人を動かし、組織を動かし、世の中を動かしていく知見を与えてくれます。正しく活かす気持ちと共にあれば、どんな立場でも、どんな場面でも、人生をうまく運ぶ道しるべになるでしょう。あなたは、何のために経営学を学びますか。何のために生きるのでしょうか。理論と実践の繰り返しのなかで、緊張感と真剣さをもって、問い続けて欲しいと思います。